

茨木高校野球部

OB会報

発行
大阪府立茨木高校
野球部OB会

振り返って

高28回 小川 博



新緑の候、OBの皆様には、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。さて、この原稿執筆の依頼があり、OB会に対して何も貢献していないものが、このような大役をおおせつかり、何を書けば良いのか悩みましたが、私、小川博（旧姓張本）は、幸運にも夏の大会BEST4の主将をさせて頂いたものです。

茨高野球部にとっても、私自身にとっても、大きな出来事である、

BEST4に関する話をするので、ご了承下さい。

私達高校28期生は、学区再編の第1期生です。（ちなみに今年度は、35年振の再編年です。）

学区トップ校になったという、例年とは違う雰囲気の中、野球部に入学しました。

3年生が2人、2年生が6人と9人に満たなく、同期の高倉君が入学式前から入学して試合に出ているというところに、何と1年生が10人も入学したのです。加えて、経験者がほとんどで、かつ、主力レベルが半数もいるという、質量とも近年にないことだと、先輩達が驚いていたことを覚えています。

当然私達自身も、このような仲間がいると、今までにないことができるんじゃないかと熱を帯びてきたのも確かです。

全体練習後も、日が暮れるまでグラウンドに残り、個々の課題に取り組んだり、野球だけでなく、勉

強や恋愛のことなども相談し合ったりして、絆を深めていったものでした。

その時々、今監督をされている池永先輩（当時、阪南高監督）が帰路に寄られ、茨高野球部の歴史から茨高生としての心得、当然野球のアドバイスもして頂きました。そして、もつと嬉しいことにジュースやアイスなどの差し入れもありました。おもしろかったです。有難うございました。

このようなことも多くあり、ほとんど仲間としての絆は強くなりました。

当時は、常任監督というシステムではなく、試合の度毎に、その日が可能な先輩に来て頂き、当日にサインの確認や、部員状況を報告して、試合に臨むという形態でした。また、その試合も、スケジュールを組むのは、マネージャーの役割でした。（感謝です。）

このシステムは、決してマイナスイヤ因ではなく、私達自身には、野球をするということに対して、自主管理ができ、主体的になったので、プラス要因として、はたらいたと思います。

上級生になると、エース4番の高倉君、シンクタンク（実質の監督）の捕手森田君を中心に、下級

生の力も加わったので、甲子園常連の北陽（現阪神監督の岡田氏）に3連勝、浪商にも連勝したりと、何か向かうところ敵なしの気分でした。

只、本当の力はついていませんでした。私学強豪など強いと思える相手には、力がうまく噛み合うのですが、逆の場合は、空回りとなり、敗戦も公立高の方が多かったです。さらに、それに関しても十分な反省はしていなかったと思います。

そして、最後の夏の大会。一回戦は、公立無名の扇町高。

私達の悪い側が出ました。先取点を奪われ、いつでも返せると思う間に、気がつけば、0対2で九回裏という場面。「俺ら負けるのかこんなところ相手に。」と思った矢先、一死満塁で代打に起用された一年生今泉君が、初球を中前打し、同点に追いついたのです。この一打がなければ、BEST4は無かったわけです。

振り返れば、なぜ準決勝まで進めたかは、確かに超高校級の高倉君（北陽・岡田を凌ぐ大阪No1投手）という核があったことは否めないですが、それ以上に野球という課題を共有しうる仲間（部員だけ

でなく、学校関係者、OB諸兄、

保護者など関係する全ての人々の存在と、その仲間にも、自分達にも「期待」という可能性の空気が醸成され、かつ、その空気の密度は高く、一様に行き渡ったからではないかと思えます。

内的にも、外的にも現状の戦力を分析し、その事実認識を各成員が把握し、その下で適正なる目標を設定し、そこから、各成員の役割が決まり、それらを互いに、全うするように期待し合うことができれば、まだまだ、力は発現しうると思います。

私達が超高校級投手がいるのに、BEST4止まりだったのは、状況認識、目標設定が不十分であったと、今では自戒をしています。

課題を共有しうる仲間の存在の大切さを知らしめてくれた茨高野球部。本当に有難うございました。OB諸兄、現役諸君の今後の発展を祈念して、終わらせて頂きま

す。最後に、私達をずっと見守って下さった、顧問の大垣先生、本当に有難うございました。

